事例No.	1318
公表年度	H30
団体の属性	一般市
団体名	新潟県柏崎市

事例区分	地域活性化

タグ	・関係人口 ・移住定住 ・地域運営組織

事例種類	関係人口

事例内容・タイトル

「かしわざきカレッジ@たんねの開設」事業

出典

平成30年度「「関係人口」創出事業」モデル事業調査報告書

5. 新潟県柏崎市 「かしわざきカレッジ@たんねの開設」事業（事業パターン（1）①）

5.1 地域の特徴・課題と事業のねらい

(1) 地域の特徴

柏崎市は新潟県のほぼ中央部に位置し、海や山など豊かな自然のなかで、自動車部品を中心とした機械金属工業が主力の産業構造を形成している。人口は約 8 万 4 千人である。「人口減少と少子高齢化の同時進行への対応」を最重要課題に位置付け、分野横断的に各種施策を展開しており、その取組の一つとして、継続的な人と人とのつながりによって地域の元気の創出を目的に、平成 28 年 10 月に「柏崎ファンクラブ」を設立し、会員の拡大と活動機会の充実に取り組んでいる。現在会員数は 5,757 人（平成 30 年 12 月末現在）を超えており、そのうち 2,529 人は市外会員であり、この市外会員はまさに柏崎市の関係人口と位置づけることができる。

市内には住民主体で地域づくりを行う地域がありながらも、そのいずれの地域も過疎高齢化の中で地域づくりのキーパーソンの多くがシニア層という現状であり、地域づくりの担い手の確保が求められている。

(2) 事業のねらい

市内の特に過疎化の進行する山間部では、地域の活力を維持していくため、地域づくりの担い手の確保が求められている。このような地域の活力を維持していく取組を、柏崎に思いを持ち、継続して柏崎との関わりを求めている柏崎ファンクラブ会員の活動の機会として提供することで、市外からの地域づくりの担い手となりえる人材との継続的な関係性を築いていく。

5.2 事業内容

(1) 「関係人口」に対して地域と継続的なつながりを持つために実施した取組内容

本事業で活用する地域資源を、女子美術大学と谷根地域で共同開催するアートイベント「たんねのあかり」および谷根地域に設定し、地域学習、地域接触、地域実践の 3 つのステップで構成するプログラム「かしわざきカレッジ」を開催した。地域学習では、都内を会場に地元からゲストを迎えての座学を 2 回開催し、この座学を受け地域接触、地域実践として、地域の散策や作品作り、交流会を経て「たんねのあかり」の運営など 3 回の短期インターンシップを実施した。

〇かしわざきカレッジ@たんねの開校－STEP1 地域学習（谷根を知る）；都内で座学を開催
〇かしわざきカレッジ@たんねの開校－STEP2 地域接触（谷根に会う）；都内で座学を開催
〇かしわざきカレッジ地域実践（谷根で動く）；計 3 回の現地訪問を実施

(2) 「関係人口」を募る仕組みの詳細

「かしわざきカレッジ」の受講生の募集にあたり、市および本事業の連携団体である柏崎シティセールス推進協議会のそれぞれのホームページ、Facebook、twitter での周知の他、柏崎ファンクラブメールマガ

ジンの配信、チラシ配布、UI ターンフェアでの声掛け、Facebook 広告などを実施した。6 月 26 日から 7 月 8 日までを当初の募集期間としたが、参加申込が 3 人だったことから、期日を 8 日間延長して 7 月 16 日までとし、呼びかけ方法の追加と募集期間を継続すると 16 人から申し込みがあった。うち、15 人を受講生として「かしわざきカレッジ」を開校した。

期間延長中は、ホームページ等による一方的な情報発信の手法だけでは申込獲得に至らなかったことを踏まえ、担当者や関係者の人脈の活用よる対面での呼びかけにより定員数を超える応募を獲得できた。

(3) **個別事業毎の実施内容**

「かしわざきカレッジ」は三段階に分けて実施した。実施内容は以下のとおり。

1）かしわざきカレッジ@たんねの開校－STEP1　地域学習（谷根を知る）：計 2 回

第 1 回を 7 月 21 日、第 2 回を 8 月 4 日に都内で開催した。第 1 回目ではゲストから谷根地域および「たんねのあかり」についてのゲストトークとグループトークを実施し、谷根地域や「たんねのあかり」に対する受講生の理解を深めた。出席者は 14 人だった。第 2 回目では「たんねのあかり」について具体的な内容や進め方や外部人材が感じる地域の魅力について、ゲストが投影資料や動画を用いて説明した。出席者は 10 名だった。

それぞれの回で、2 グループに分かれてグループトークを行ったため、受講生一人ひとりがゲストと交流できた。ゲストとして参加した地域住民が受講生へたんねのあかりの手ぬぐいをプレゼントする場面もあり、受講生にとても喜ばれた。

2）かしわざきカレッジ@たんねの開校－STEP2　地域接触（谷根に会う）

かしわざきカレッジの第 3 回目として、8 月 18 日～19 日に 1 泊 2 日で短期インターンシップを実施した。参加者は 11 人だった。18 日には、谷根地域を散策し、たんねのあかりイブニングレクチャーを開催、19 日は、たんねのあかりワークショップに参加し、作品作りを行った。

受講生の谷根地域に対するイメージについて、来訪前は「自然」を挙げる受講生が多かったが、来訪後は「人」を挙げる受講生が多くなっており、地域との関係性を深める上で地域住民との出会いやふれあいは、重要な要素となることがうかがえた。

3）かしわざきカレッジ@たんねの開校－STEP3　地域実践（谷根で動く）：計 2 回

かしわざきカレッジの第 4 回目としてインターンシップを 9 月 8 日～9 日に実施し、たんねのあかり開催に向けた作品づくりを地域住民と一緒に行った（参加者　14　名）。また、第 5 回目として 3 回目のインターンシップを 10 月 12 日～14 日に開催し、たんねのあかり当日の作品設置準備から後片付けまで地域住民と一緒に行った（参加者　11　人）。たんねのあかり当日に向けた作品作り、当日の作品の設置や撤去といった作業の合間に地域住民の計らいによる、くるみ拾いや枝豆・サツマイモ収穫、柿もぎ体験は受講生の満足度を一層高めた。これらに加えて、地元の人々との交流会は互いの距離を一層縮めることができた絶好の機会だったといえる。本番当日の谷根地域を照らす多くのあかりの風景、たくさんの来場者と、来場者の歓声は谷根の人々とつくりあげてきたという達成感と感動を受講生に与えることができた。

5.3　成果分析

(1) 地域課題への取組結果

本事業は、柏崎ファンクラブ会員の活動機会を提供することで、地域づくりの担い手となりえる外部人材と継続的な関係性を築くことを目指したが、その取組結果は以下のとおりとなった。

〇柏崎ファンクラブ会員を主なターゲット層としていたが、実際の受講生は、既存の柏崎ファンクラブ会員からは 2 名で、それ以外は本事業をきっかけとしていた。

〇受講生がイベントを作り上げる一員として一生懸命活動に参加し、作業がスムーズに進んだ。地域住民が受講生に対し感心していた面もあり、地域住民と受講生の互いの信頼が少し深まったように見受けられた。

〇作業や地域住民の計らいによる体験等を通して地域住民と受講生の関係性が深まったようだった。

〇地域住民と連絡先を交換した受講生もいた。

これは、受講生が単なる旅行者ではなく、一緒に作品・イベントを作り上げる担い手の一人であるという認識を持って、活動に参加し、そこにやりがいや楽しさを感じることができたからだと考えられる。

また、谷根地域を訪れた際に触れ合った自然や温かい人たちに対し、魅力や愛着を感じ、再び谷根地域に足を運びたいと感じた修了生が多かったと思われる。さらに、「谷根以外の場所も訪れてみたい」という回答も多く、宿泊場所を柏崎駅前にしたことや、地域住民との会話の中で出てくる柏崎市の情報から、谷根地域に限らず広く柏崎市に対しての関心が高まったのではないかと予想される。

(2) 事業参加者に対するアンケート等の結果及び分析

「かしわざきカレッジ@たんね」修了生 13 人を対象に実施したアンケートでは、今後の谷根との関わり方について、「次回のたんねのあかりに手伝いたい」という回答が最も多く、次いで「次回のたんねのあかりや谷根地域に足を運びたい」という回答が多くなっていた。ここから、修了生が本事業を通し、地域住民や谷根の自然と触れ合うことで、地域に愛着を持ち、自分も活動の担い手として関わりたいと感じていると考えられ、関係人口としての第一歩となっている。

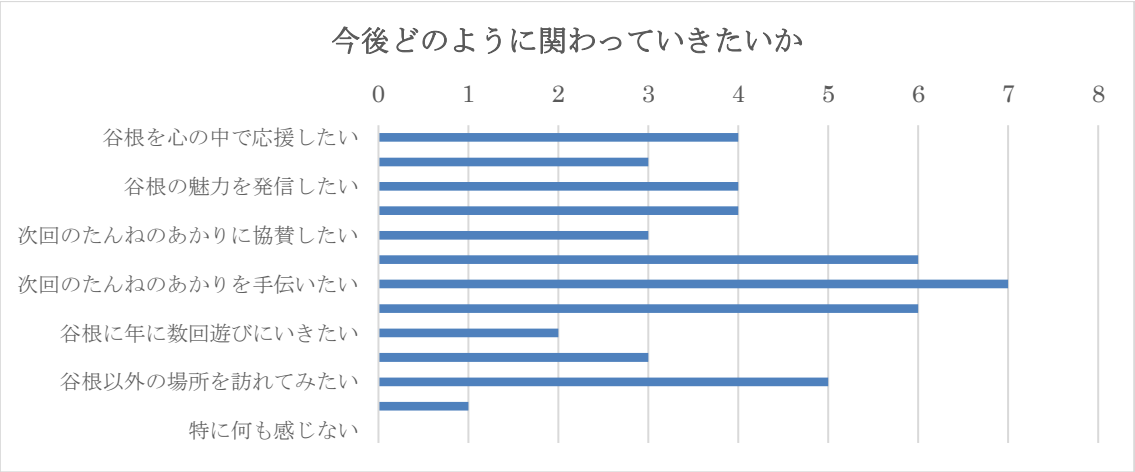


図 II-5 参加者への最終アンケート結果

出所）柏崎市成果報告書

(3) **成果の分析**

1) 設定した定量目標と達成状況

関係人口となりうる受講生と関係性を深める相手となる地域住民の人数、受講生の思いの深化や受入地域の意欲向上を目標に設定し、参加者の募集については苦戦したが、いずれも目標を達成することができた（目標 15 人、応募実績 16 人）。

2) 事業の遂行体制・役割分担

既存の主体、既存の取組などを最大限活用することで、各主体に無理が生じない持続的な取組となるよう配慮し、事業を遂行した。結果として、アンケートから受講生の谷根地域に対する思いの深化がうかがえた。

3) 事業参加候補者のターゲティング・募集方法

地域づくりの担い手として活動してもらうことや最終的には定住人口の増加に結び付けていきたいというねらいから、首都圏在住の若い世代（20～40 代）をターゲットに設定した。その結果、20 代 8 人、30 代 2 人、40 代 6 人の計 16 人から申し込みがあったが、柏崎ファンクラブ会員は 2 人のみであり、それ以外は本事業の申し込みをきっかけに入会した新規入会者であった。

4) 継続的な仕組みと交流の構築

本事業は柏崎ファンクラブという既存の仕組みを活用したため、継続的な仕組みは既に出来ていると言える。この仕組みに加え、一部の参加者は地域住民と個人的に連絡先を交換しており、現在でもやりとりが継続している。

5) その他特記事項

想定以上の成果としては、地域住民が自発的に参加者に対し、歓迎の姿勢を示してくれたことがあげられる。参加者の地域への思いの深化はこういった地域住民の関与が大きな要因であったと言える。

一方、既にある関係人口との調整や、参加者同士の人間関係へのフォローは重要な課題であると認識している。

(4) **今後の取組に向けた課題**

1）〇地域への意識啓発

本事業は、既に外部人材の受入れ実績のある谷根地域を対象に行ったため、現地での活動を非常にスムーズに進めることができた。しかし、市には地域活動の担い手不足に困っている地域がまだ多くあり、その大半は外部人材受入れの実績はない。そのため、どのように受け入れればいいのか、何をしなければいけないのかが未知であり、消極的になっていると考えられる。今後は、外部人材受入れの素地のない地域に対しても積極的に意識啓発を行い、まずは短期的にも関わる機会を提供し、外部人材を受け入れる意義や効果を実感してもらう必要があると考える。

2）〇コアな会員の創出

既存の柏崎ファンクラブ会員に対し具体的な活動機会や地域住民との交流機会を提供することで、よりコアな関係人口を創出することを目的に実施したが、募集段階で柏崎ファンクラブが十分に機能できなかったことは課題ともいえる。実際に参加者のうち柏崎ファンクラブ会員は 2 人のみだった。今後は本事業のように柏崎ファンクラブ会員の関われる余地を増やし、一人でも多くコアな会員を増やしていく必要があると考える。

3）〇財源の確保

対象者人数に対し、経費が掛かりすぎていることは大きな課題である。参加者と地域住民の関係性を深めるためには、本事業で実施した程度の交流回数が必要だと考えるが、それを実行するためには相応の経費が必要となる。削減できる経費と徴収できる財源について精査した上で、取り組むことが求められる。

4）〇今後の展望

既存の組織・体制を最大限に活用して事業を実施したことにより、非常に柔軟な対応ができた。今後も市が持つ既存の活動や体制を生かし、新たな負担感を生まずに関係性を深めることに注力できるような取組を市内の地域や団体と連携して進めていく。その際には、行政の介在頻度はできるだけ減らし、民間や地域、外部人材が主体となるよう努める必要がある。

また、本事業では、受講生への費用負担は最低限としたが、今後持続的に取り組むために、参加人数や移動手段を工夫し経費を削減するとともに、参加者から一定程度の参加費を徴収することを検討する。

今年度では「たんねのあかり」という地域のイベントを資源として活用し、かしわざきカレッジの受講生はイベントを通じて地域の担い手となった。テーマ性の高いイベントを活用したことで受講生を惹きつけたという側面がある一方で、地域側からすると、日常の困りごとの方が深刻であり、そういった地域課題に関係人口が到達するまでのハードルが存在する。このハードルを乗り越える取組も求められる。